

曹咏梅 提出 学位申請論文（課程博士）

『歌垣と歌謡の日中比較研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

曹咏梅氏提出の論文「歌垣と歌謡の日中比較研究」は、日本古代に見られる歌垣や歌掛けの習俗を基盤に生成された恋歌の生態について、日中の比較的方法から論じたものである。全体の構成は、「序論」に続いて第一編では「歌垣と恋愛歌謡の形成」の題のもとに「第一章 嬬歌と歌垣―東アジアの歌掛け習俗を中心に―」、「第二章 山の歌垣―古代日本と中国を中心に―」、「第三章 水辺の歌垣―万葉集の恋歌と七夕歌の形成―」、「第四章 海石榴市の歌垣―歌の闘争をめぐって―」、「第五章 門前の歌―古代日本と中国を中心に―」、「第

第六章 上巳節―鄭国の民俗及び後世への展開―」があり、第二編では「民間歌謡から詞へ」の題のもとに「第一章 採桑の文学―神々の授けた恋愛歌―」、「第二章 万葉集巻頭歌の形成―中国採桑文学との比較―」、「第三章 東歌と季節―三三五二番歌を中心に―」、「第四章 呉声子夜歌―子夜四時歌の形成―」、「第五章 上代日本における『ふり』と『曲』」があり、最後に「結論」が置かれている。

第一編「歌垣と恋愛歌謡の形成」では、歌垣と歌掛けの習俗を基盤に生成される恋愛歌謡について論じる。第一章「嬬歌と歌垣―東アジアの歌掛け習俗を中心に―」は、『万葉集』第三期に登場する高橋虫麻呂が、東国の歌垣を『文選』に見える「嬬歌」という漢語を以て記した意味について論じたものである。この漢語は中国南方の巴人の奇習とともに記された歌舞の様子を意味した。その巴人の子孫といわれるのが現在の土家族であり、土家族地区には摆手舞という歌舞が行われており、これは中国史書に記録された巴人の歌舞とも合致し、ま

た日本の古代文献に見える歌垣（踏歌）の記録とも合致する。高橋虫麻呂は漢籍の知識に基づいて日本の辺境の地の民俗行事である歌垣を指して用いたのである。

第二章「山の歌垣―古代日本と中国を中心に―」は、日中の比較を通して山の歌垣の特質を見出した論である。そこでの特徴は、春と秋の季節に山とその水辺で行われ、男女が集まり、歌を掛け合い、楽器が用いられ、贈り物が贈られる、ということにあるが、山の歌垣は、もともと山の神を楽しませる神事的な性格が存在したと思われる。歌垣の場である「山」は、神々の恋愛の伝説を含みもちながら伝承されていたことを論じる。

第三章「水辺の歌垣―万葉集の恋歌と七夕歌の形成―」は、「人麻呂歌集七夕歌」の中で七夕に関わる語彙を持たない歌がどのように生成されて、それがどのように七夕歌と認定されたかについて考察した論である。「人麻呂歌集」に七夕語彙の見られない歌が存在するのは、もともと川辺で行われた歌垣習俗

に出発した歌が、七夕伝説の流入により七夕歌へと展開を示すことになったからだと想定する。いわば川は恋する男女の仲を隔てる障害の譬喩として歌われ、川を渡るとは相手との愛の成就を遂げること以外ならなかったのである。このように山や川は恋の障害を象徴しており、それを越えることは恋の成就につながるのだが、それを越えることは駆け落ちへと向かうことを意味した。日本古代の七夕歌の成立する事情は、中国古代の七夕伝説の原形が形成されることと共通すること、日中に伝わる七夕伝説は、各時代に七夕詩や七夕歌を形成したが、その背後にいずれも水辺の歌垣という共通した民俗的行事が存在したことを論じる。

第四章「海石榴市の歌垣―歌の闘争をめぐる―」は、海石榴市の歌垣について考察し、さらに古事記・日本書紀の海石榴市の歌垣に見える歌の闘争について考察した論である。海石榴市は他者と出会う交易の場であり、他郷と接する交界の場であったと考えられ、記・紀では海石榴市の歌垣の物語を記録して

いる。そこでは歌による激しい闘争性が認められ、歌垣が歌の闘いを基本とすることにより成立していたことが知られること、このような歌垣の闘争性は恋愛に関わる闘争であり、それが同時に人々の娯楽性と重なりながら存在したことを論じる。

第五章「門前の歌―古代日本と中国を中心に―」は、万葉集の後期に登場する家持や湯原王が詠む〈門前で帰される歌〉を中心に、『詩経』の「門」にまつわる歌謡と中国少数民族の妻問いの習俗や婚姻儀礼に歌われる歌とを比較しながら考察した論である。『万葉集』に門前の恋歌が類型的に存在することから、家持の歌はその系列の中に位置づけられるが、そうした歌は実際の習俗としてあり得たのかを探る。『詩経』では「東門」や「垣」などが男女の恋の場、歌垣の場としてあること、中国西南少数民族には門前で恋歌を掛け合う習俗が認められることから、中国では「門」が男女の恋の場や歌の場としてあることが認められる。天平時代には門の前・垣の前を素材とした恋歌がテーマ化し、誘

い歌の形式を形成していることから、その背後には門前の恋歌が習俗として存在したことを論じる。

第六章「上巳節―鄭国の民俗及び後世への展開―」は、『詩経』の溱と洧の河を詠んだ歌謡を中心に、上巳の祓禊儀礼と水辺の歌垣との関係について述べ、日中における後世への展開について概観した論である。『詩経』の「溱洧」詩は祓禊儀礼が基盤にあると思われる詩であるが、さらには歌垣の情景をも詠んだ詩であることを推定する。古代中国の祓禊は除災・雨乞い・五穀豊饒・求子・結婚などの要素を含んだ儀礼であったと考えられ、上巳は字義から求子に通じ、上巳の禊ぎから恋愛へと転じたのは禁忌から解放された悦びであると同様に、求子・結婚活動の延長線に発展したものであるが、六朝時代には曲水流觴の行事、貴族や文人が詩を詠んで楽しむ風流韻事へと定着した。この曲水の行事は日本に伝来し、天皇を中心とした宮廷の行事として受容されたことを論じる。

第二編「民間歌謡から詞へ」では、主に民間歌謡の生成と民間歌謡から詞への展開などについて論じる。第一章「採桑の文学―神々の授けた恋愛歌―」は、中国侗族に伝わる古歌「采桑之歌」に注目して、採桑が恋と結びついた理由を追究する。中国の採桑文学は桑摘み女と通りがかりの男との情話が主題である。『詩経』の国風歌謡における採桑は男女の恋愛の媒体としてあり、「七月」詩には採桑説話の先蹤を見ることができるといえる。一方、侗族の「采桑之歌」には、桑摘みなどの生産労働が男女神の恋愛の媒体として登場し、男女神によって展開される採桑説話が認められる。これはまた翁焦僚と廈格女が恋愛の神でありながら、農桑を教える農耕の神であったから可能であり、人々に恋愛と農耕の道を案内するための神話世界だから可能であったとする。

第二章「万葉集巻頭歌の形成―中国採桑文学との比較―」は、中西進氏の論を再確認しながら、巻頭歌が形成される基盤について論じたものである。巻頭歌の前半は天皇が菜を摘む少女に求婚を行う場面であるが、これは採桑説話と

類似の中であり、その背景と重なることが知られ、中西進氏の説は肯定すべきだと結論づける。巻頭歌の後半はわれなる人物、天皇の名のりであるが、この場面は竹取の翁の歌物語と発想や構造を等しくしながら、農村的行事から王権社会へと向かっていくものであり、春の初めにまれびとが訪れて予祝行事を行う民俗行事を基盤にして、一方は竹取の翁の話へ、一方は天皇が若菜を摘む少女に求婚する巻頭歌に向かったことを論じている。

第三章「東歌と季節―三三五二番歌を中心に―」は、東歌の三三五二番歌を解釈し、東歌と時節の関係について考察した論である。当該歌の「ほととぎす鳴く声聞けば」は、農の時を知らせながらも恋情を引き起こす二重性を具えていること、つまり農耕労働の背景を具有しつつ恋歌へと向かっていく内容で、当該歌のような特質はほかの東歌からも確認できるとする。東歌に見える生産労働の多くは恋歌に組み込まれているが、それらは労働の時節を表しながら恋情を引き起こす序詞としてあり、季節感が希薄だといわれる東歌であるが、東

国の人は農耕生活から季節を認識したのであると論じている。

第四章「呉声子夜歌―子夜四時歌の形成―」は、楽府の子夜四時歌の形成について論じたものである。季節の中の恋を詠むことは古く『詩経』の「七月」に遡る。『楽府詩集』の「月節折楊柳歌」は季節の推移とともに恋を詠むことにおいては子夜四時歌と共通する。このような十二月歌は現在の民間歌謡に多く存在するものであり、中国西南少数民族地区には季節の農事を教える農事歌が多くあり、それは歌掛けや歌垣の行事とともに農事と恋を詠む恋歌に変身する。民間では歌掛けや歌垣を基盤にして農事・季節・恋が一体になった季節の恋歌が形成され、一方都市では文人の詩壇や妓女たちの社交の場が歌の場となり、民間の四時歌を季節の恋歌に変身させたのであろうと論じる。

第五章「上代日本における『ふり』と『曲』」は、『日本書紀』がなぜ「ふり」を漢語「曲」を用いて表記したかについて追究した論である。和語の「ふり」は日本古来の歌曲名として存在した。一方、中国における「曲」の概念は、詩

歌に音律を合わせて楽器を伴うものであった。「曲」は中国の楽府に多く見られ、楽府によって「曲」の概念が形成したと思われる。上代日本において「振(ふり)」に「曲」を用いたのは『日本書紀』からであり、漢語「曲」の意味を理解することで、中国の楽府の用語を用いたものと思われる。さらに天武朝において国風整備が急がれ、その基本を礼楽に置き、そのために音楽整備が行われたものと思われる。「ふり」から「曲」への展開は天武天皇の音楽の整備と関わるものであると論じる。

以上が各章の概要であるが、歌垣の習俗から詩や歌が展開するという共通項を見ると、そこには東アジアに展開する文化の共有という問題が明らかになり、それぞれの国の文化を形成する基層的文化の存在が重要な意味を持つことが知られること、古代日本に展開する恋歌は、そうした歌垣や歌掛けの習俗を背景として成立する文化であったということであるに違いなく、そこには東アジアに共通する民間歌謡の性格を示すものであったということを結論としている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、古代日本に広く展開した歌垣の習俗を通して古代歌謡や『万葉集』の恋歌の生成を論じたものである。その方法としては、中国の古典詩である『詩経』や六朝時代の楽府詩、或いは『玉台新詠』などの文学文献とともに、中国西南地域の少数民族文化を参照軸として論じたところに特質があり、そのことによる成果も大きいと言える。以下いくつかの例を取り上げて、本論文の成果と課題とを見てみたい。

第一編「歌垣と恋愛歌謡の形成」の第一章には「嬋歌と歌垣―東アジアの歌掛け習俗を中心に―」の論がある。ここに見える「嬋歌」という漢語は、筑波山の歌垣を表すのに用いられた漢語であるが、これは契沖が『文選』に見えることを指摘したが、それが何を指すのか明らかではなかった。本論文ではこの漢語が中国南方の巴人の奇習を指すことを『後漢書』などから探り、それがこ

の民族の歌舞の様子を意味することを発見し、その巴人の子孫といわれるのが現在の土家族であることを突き止め、土家族地区には摆手舞という歌舞が行われており、これは中国の史書に記録された巴人の歌舞とも合致することを確認する。その上で日本の古代文献に見える歌垣（踏歌）の記録を総合的に考えると、これが土家族の摆手舞とも合致することから、高橋虫麻呂は漢籍の知識に基づいて日本の辺境の地の民俗行事である歌垣を「耀歌」と表記したのだと結論する。この論は古代日本の歌垣が中国西南民族の歌舞に類似することを指摘するのみではなく、古代の歌垣がある共通した文化性の中で中国西南から日本列島に及んでいることを指摘するものであり、新たな歌垣研究の重要な入り口を示唆したといえる。

第五章の「門前の歌―古代日本と中国を中心に―」は、『万葉集』の後期に登場する大伴家持や湯原王が詠む〈門前で帰される歌〉を中心に論じたものであり、なぜ恋歌が門前で歌われるのかという疑問に答えた論である。この門前

の恋歌は、中国古典詩の『詩経』に「門」にまつわる歌謡が多く見られ、さらに中国少数民族の妻問いの習俗や婚姻儀礼に門前の歌が歌われることを確かめ、恋歌を門前で歌うのは、それが習俗として存在したからであることを明らかにする。その上で『万葉集』に門前の恋歌が類型的に存在することから、家持の歌はその系列の中に位置づけられるが、それも古代日本に習俗として存在したことによるものであると論じる。確かに『詩経』では「東門」や「垣」などが男女の出会いの場、歌垣の場として見られ、中国西南少数民族にも門前で恋歌を掛け合う習俗が認められることから、そこに『万葉集』を重ねることで門前の恋歌も、古代の門前の習俗の中に形成したのだと考えられる。民族を越えて現れる習俗の普遍性を求め、そこから形式の類型を取り出して問題を明らかにする本論文の説得性は十分に認められる。

第二編の「民間歌謡から詞へ」は、民間の歌謡がどのように文芸性を帯びるのかを追求するものである。第四章の「呉声子夜歌―子夜四時歌の形成―」で

は、楽府の子夜四時歌の形成を論じる。古歌謡が季節を織り交せて恋歌を詠むのは、すでに『詩経』の「七月」に遡り、また『楽府詩集』の「月節折楊柳歌」は季節の推移とともに恋を詠むことにおいて子夜四時歌と共通するが、このような十二月歌は現在の民間歌謡に多く存在するものであり、中国西南少数民族地区には季節の農事を教える農事歌が多くあり、それは歌掛けの方法に基づいて農事と恋とを詠む恋歌に変身する。このように民間では農事・季節・恋が一体になった季節の恋歌が歌掛けを通して形成され、都市では文人や妓女たちの社交の場で民間の四時歌を取り込み、季節の恋歌に変身させたのであろうと論じる。古代歌謡に遡れば季節感を伴う歌謡は限られて来るが、民間の歌謡が農事と恋とを一体に歌う傾向があり、それが都市の文芸として季節と恋に変容させたというのは、『万葉集』の季節の恋歌が生成する問題として大きな示唆を与えるものであるといえる。

第五章「上代日本における『ふり』と『曲』」では、『日本書紀』に見える「曲」

の漢語を和語の「ふり」との関係から論じる。「ふり」は日本古来の歌曲名として存在し、その原義は身振り・手振りの振りにあると思われる。それが「曲」へと翻訳された意味はどこにあるのか。中国における「曲」の概念は、詩歌に音律を合わせる楽器を伴うもので、この「曲」は中国の楽府に多く見られることから、楽府によって「曲」の概念が形成したことを論じ、その上で上代日本において「振^{ふり}」に「曲」を用いたのは『日本書紀』からであり、漢語「曲」の意味を理解することで、中国の楽府との関わりを目論んだものと推測し、それは天武朝の国風整備と一体であったとする。天武天皇は治国の理念を礼楽に置いていたことから、「ふり」という和語を「曲」へと翻訳し、楽府の政治的理念に合わせたのであると結論する。従来、振りの研究は行われて来たが、楽府との関係は明らかにされなかった。これを楽府の曲との関係を説いて、それを天武天皇の礼楽思想に求めたことは高く評価できる。

以上のように、本論文は『万葉集』の生成を中国の古典詩や少数民族文化を

丹念に調査しその類型を求めらるることで、そこに詩歌の形成の普遍性を明らかにしたところに特質が認められる。その意味では今日的な視点と主題を自覚的に求め、新しい発見が多く見られる論文である。これを第一段階とすれば、第二段階として古代歌謡生成の文学史的構想が求められなければならないであろう。それはここまでの論をより緊密なものとして構成する必要があるからであり、そのことは十分に期待できるものといえる。よって本論文の提出者曹咏梅氏は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成二十二年二月十八日

主査 國學院大學教授 辰巳 正明 ①

副査 國學院大學教授 小川 直之 ①

副査 國學院大學准教授 黒澤 直道 ①